



03 特集

「連携」のコーディネーターたち

互いの強みを生かす 一地域社会と連携した方言辞書作成プロジェクト
 日本・中国・ラオス3者が連携した「健康研究」に向けて
 異分野融合で発展する研究インフラ 一大規模コーパス構築の裏側
 大学間の連携枠組みを通して見えたもの 一第17回北東アジア学術ネットワーク年次大会参加記
 身近な隣人 一イスラームについての「教材」開発
 現地学術コミュニティとの協働 一ネパール、マーティン・チョウタリ研究所とのつながり

01 人間文化研究機構 総合人間文化研究推進センター事業・基幹研究プロジェクト概要

10 きざし通信

11 研究をむすぶ 第2回アジア・エコヘルス研究フォーラム
 「北東アジアにおける『近代』空間の形成：帝国と思想」国際シンポジウム
 ミュンヘン五大陸博物館におけるシーボルト展
 新たな成果が際立った国際シンポジウム 一バチカン図書館および大分県との協業

15 研究をはぐくむ 江戸時代の絵入百科事典を現代につなげる
 企画展「サウジアラビアオアシスに生きる女性たちの50年」関連イベントを通じて
 南アジアセミナーにおけるGIS講習会

18 研究をひらく 特集展示「よみがえる地域文化 一岐路に立つ共同体(コミュニティ)のいまー」
 企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」
 第22回国際比較文学大会においてパネル実施

21 歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業 資料保全のネットワーク構築と大学間連携の展開

22 若手研究者海外派遣プログラム報告 19世紀イタリア楽壇における日本への眼差し

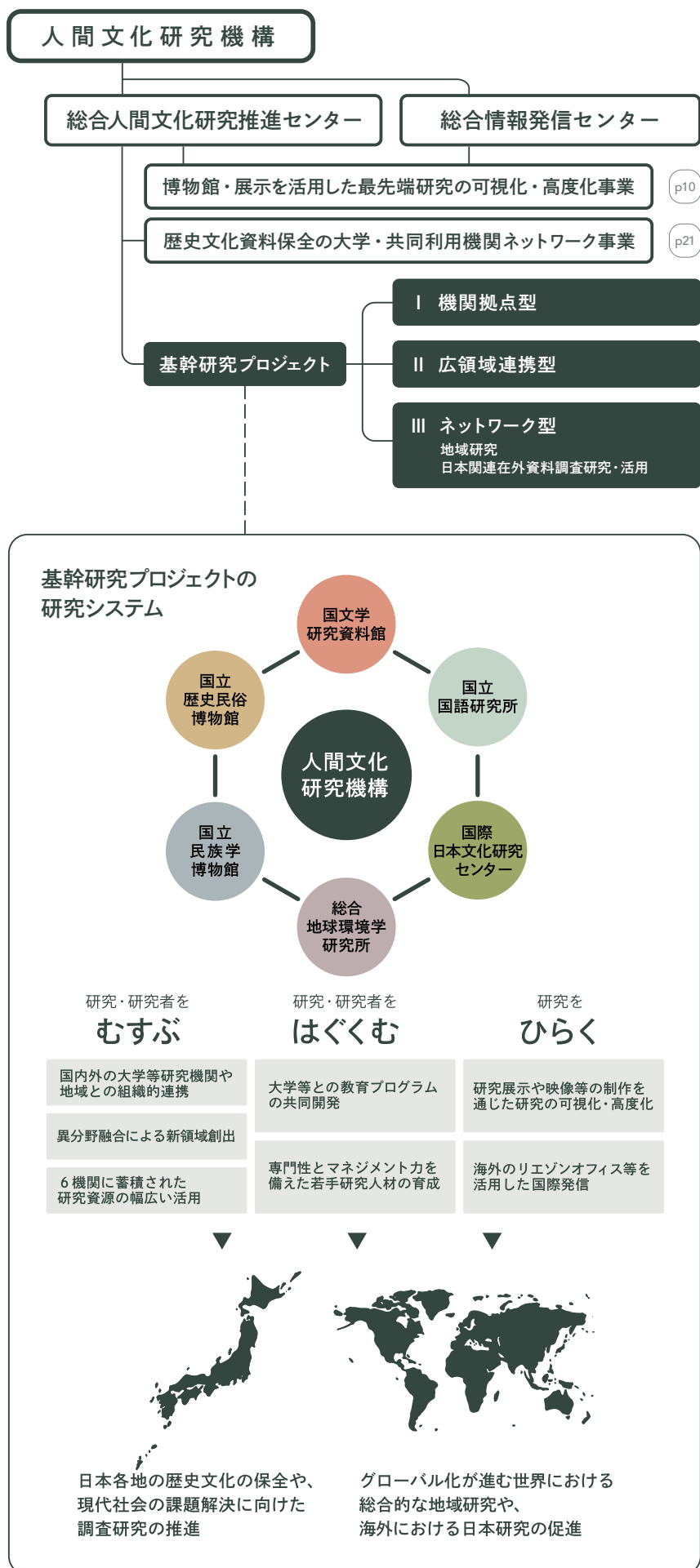
人間文化研究機構「総合人間文化研究推進センター」(推進センター)は2016年度より6ヵ年計画で、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、機構を構成する6機関と国内外の大学等研究機関、地域社会、産業界が連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進しています。

「基幹研究プロジェクト」は、(Ⅰ)機関拠点型、(Ⅱ)広領域連携型、(Ⅲ)ネットワーク型の3類型で構成されています。研究推進においては研究者コミュニティによる独自の評価システムを導入し、PDCA サイクル〔研究目的の明確な設定(Plan)、ロードマップに基づく実施(Do)、研究者自らの点検・外部評価(Check)、その点検評価をうけた改善(Act)〕を実施して着実な研究目的の達成をめざします。研究成果については、出版、データベース、映像や展示の製作等を通じて広く公開するとともに、国内外の大学における教育プログラムとして活用を図る計画です。

また「総合情報発信センター」と連携して「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」を推進し、これらの事業を通じて、人間文化の最先端研究を可視化し、学界や社会と協働して研究の高度化や新領域創成を図る、新たな人文学の研究システムを構築します。

2017年度より開始した「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」においては、人間文化研究機構・東北大学・神戸大学を拠点とし、全国的な大学間ネットワークの構築を通じて、地域の歴史文化資料の所在情報の把握、データ記録化、相互レスキュー支援体制の構築、教育プログラムの開発、国際的な情報発信などを進めています。

本冊子では、基幹研究プロジェクトを中心とする新たな人文学の“^{きざ}萌し”を広く社会と共有するべく、その試行錯誤の過程や成果について紹介していきます。



I 機関拠点型 基幹研究

本機構の6機関が、それぞれのミッションを体現する重点的な研究テーマを掲げ、国内外の研究機関や研究者と連携し、専門分野の深化を図る挑戦的な研究に取り組みます。

国立歴史民俗博物館（歴博）	総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築
国文学研究資料館（国文研）	日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワークの構築
国立国語研究所（国語研）	多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓
国際日本文化研究センター（日文研）	大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出
総合地球環境学研究所（地球研）	アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発
国立民族学博物館（民博）	人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

II 広領域連携型 基幹研究

歴史、文学、言語、地域研究、環境等の専門分野を擁する本機構の6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携しながら、新たな人文科学の研究システムの構築に取り組み、異分野融合による新領域創出を目指します。

● 日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

p4-10-18

歴博	地域における歴史文化研究拠点の構築
国語研	方言の記録と継承による地域文化の再構築
民博	日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築
国文研	人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究
地球研	災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生

● アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

p5-10-11

地球研	アジアにおける健康と環境：新たな人間と環境との関係性としての「エコヘルス」概念の再構築に向けて
国文研	アジアの中の日本古典籍—医学・理学・農学書を中心として—
民博	文明社会における食の布置

● 異分野融合による「総合書物学」の構築

p6-15

国文研	総括事業の推進
歴博	古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究
国語研	表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化
日文研	文化・情報の結節点としての図像

III ネットワーク型 基幹研究

世界における日本や社会・文化を考える上で重要な課題を掲げ、国内外の大学等研究機関とネットワークを形成し、多様な分野を横断する総合的な研究に取り組みます。

地 域 研 究

日本の文化、社会、政治、経済、環境にとって重要でありながら、総合的な研究が十分でない3地域を対象に調査研究を行い、日本と対象地域間の相互理解を促進します。

● 北東アジア地域研究

[中心テーマ] 北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道

p7-10-12

● 現代中東地域研究

[中心テーマ] 地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして—

p8-16

● 南アジア地域研究

[中心テーマ] グローバル化する南アジアの構造変動—持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究—

p9-10-17

日本関連在外資料 調査研究・活用

欧米にある日本関連資料の中には、所在情報や資料価値の掌握がされていない貴重な資料が多数存在します。こうした文書、音声や実物資料等の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進します。

● プロジェクト間連携による研究成果活用

日文研

p20

● ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—

歴博

p10-13

● バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用

国文研

p14

● 北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—

国語研

p19



特集

「連携」の コーディネーター たち

研究は出会いのつながりです。さまざまなひと、もの、ことが時間と空間を超えて、研究者の思索・議論・実践のなかで交錯することで、知が生まれ出ます。多様な思考を持つ研究者が共同で研究を組織することは、それぞれに十分に個性的な知の分野や専門を超えた交流によって、新たな研究を展開しようとする試みです。人間文化研究機構が現在取り組んでいる基幹研究プロジェクトは、人間文化にかかわる現代的な課題に対して、共同研究を組織することで、解決に資することを目指しています。共同研究を実りあるものとするため、それを方向づけるリーダーシップのもとで、ひと、もの、ことをどのようにつなぐのか、研究のコーディネートが欠かせません。基幹研究プロジェクトでは、若手研究者の育成の一環として、センター研究員の皆さんにコーディネートの役割を担っていただくことで、自らの研究の進展と新たな研究計画立案に役立ててもらうことを期待しています。研究者同士のやり取りはもとより、フィールド調査などで、対象とする地域に暮らす方々をはじめ、多くの関係者と一緒に研究を共に創ることに、みな奮闘している様子がうかがわれます。本特集では、コーディネーターの方々のさらなる発展の可能性を存分に感じていただきたいと思います。



総合人間文化研究推進センター長
窪田順平



山深い椎葉村。ここは「仙人の棚田」や「椎葉のマチュピチュ」とも呼ばれています

互いの強みを生かす 地域社会と連携した方言辞書作成プロジェクト

麻生玲子 ● 総合人間文化研究推進センター研究員・国立国語研究所 特任助教

広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会の変貌・災害からの地域文化の再構築」の国立国語研究所（国語研）ユニットでは、地方自治体や地域の大学と連携しながら、日本各地の消滅危機に瀕した方言の記録を行っています。その中でも私は、宮崎県において教育委員会と連携しながら進めている辞書作成プロジェクトに深くかかわっています。

宮崎県東臼杵郡^{ひがしうすき}椎葉村^{しいば}は、九州のほぼ中央に位置し、西を熊本県と接しています。深い山に囲まれ、主要な交通拠点から概ね車で2時間程度かかる、美しい自然や昔から続く独自の生活文化が色濃く残っている場所です。しかしながら、伝統的な方言は若者に受け継がれず、次第に失われつつあります。椎葉村方言には、村内での方言差が大きいという特色があります。各地点で辞書を作成するとすると、個人の仕事量をはるかに超えるため、縁あって教育委員会と国語研ユニットとの連携が実現しました。現在、進行している辞書作成プロジェクトでは、なんと村内の12地点においてフィールドワークを進めています。

辞書作りの基礎となる語彙調査（動植物の名前や、代名詞の体系など）に必要なのは、方言話者とそれを観察する調査者です。私が他地域において個人で方言調査を行う時、話者の方との信頼関係を築き、調査者である私の前に座っていただくまでが一苦労だと感じていました。一方、国語研ユニットには、心強いパートナーがいます。日頃から地域住民の方々と互いに情報を共有し合い、密にコミュニケーションをとって、良好な関係を築いている教育委員会が仲介することにより、方言話者の方にも調査に協力していただきやすくなります。

本プロジェクトで得られた椎葉村方言の調査データは、辞書としてまとめ、2020年度に出版予定です。研究者にとっては自分たちの文化の継承という願いが込められています。現地のネットワークを活用して行う調査の成果を、消滅危機方言の保存・継承につなげるという両者の共通の目的として意識することが、この連携プロジェクトを長期的に続けていくための秘訣なのではないかと考えています。

日本・中国・ラオス3者が連携した「健康研究」に向けて

蔣 宏偉 ● 総合人間文化研究推進センター研究員・総合地球環境学研究所 特任助教

広領域連携型基幹研究「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」（エコヘルス研究）は、日本・中国・ラオス3地域においてフィールド調査を展開しています。この3地域を選出した理由は、エコヘルス研究の根幹となっている「健康転換」の概念と関連しています。「健康転換」とは、「ある人間集団の疾病構造が感染症中心から非感染症中心へと転換すること」を指します。健康転換の研究のため、その段階の異なる地域を調査地として設定しました。

エコヘルス研究が目指しているのは、単に地域間を比較することだけではなく、「地域間の交流を促進し、各自の知見を提供し合いながら問題を解決すること」です。そのためには、日本を中心とする従来の国際連携の構造を変える必要がありました。

私は、プロジェクトによる調査・研究に従事する傍ら、プロジェクトのコーディネーターとして、3地域において研究に携わる人々の間の相互理解の促進に努めてきました。まず着手したのは、各地域の長所と短所の分析です。例えば、健康研究の分野において、長年、高齢化社会への対策を講じてきた日本は、今まさに高齢化している中国に、これまでの経

験の蓄積を提供することができます。一方、中国において様々な感染症を制圧した現場経験を有する人材は、ラオスの感染症問題の解決に貢献することができます（下図）。

このような構想は、エコヘルス研究の展開に大いに役に立ちました。例えば、日中が連携して行う健康研究の重要性を海南省疾病管理センターの共同研究者に理解してもらうことにより、現地でのフィールド調査やアジア・エコヘルス研究フォーラムを行うに当たって、同センターから人員と資金面のサポートを得ることができました。しかしながら、事がすべてスムーズに運ぶとは限りません。歴史文化、経済の発展の程度、関心のある健康問題などが異なる研究チームの連携のためには、相互コミュニケーションの工夫が不可欠です。幸いなことに、プロジェクト4年目となる2019年、研究ネットワークの構築の一環として、第2回の研究フォーラムを共同企画することができ、さらに、日中ラ3か国の共同調査も実現することができました（写真）。今後も、これまでの経験と知見を活かし、3か国が連携したアジアのエコヘルス研究の促進、及び各地域の健康問題の解決に努めていく所存です。



ラオス・サワナケート省における日中ラ3か国による共同調査（2019年3月）

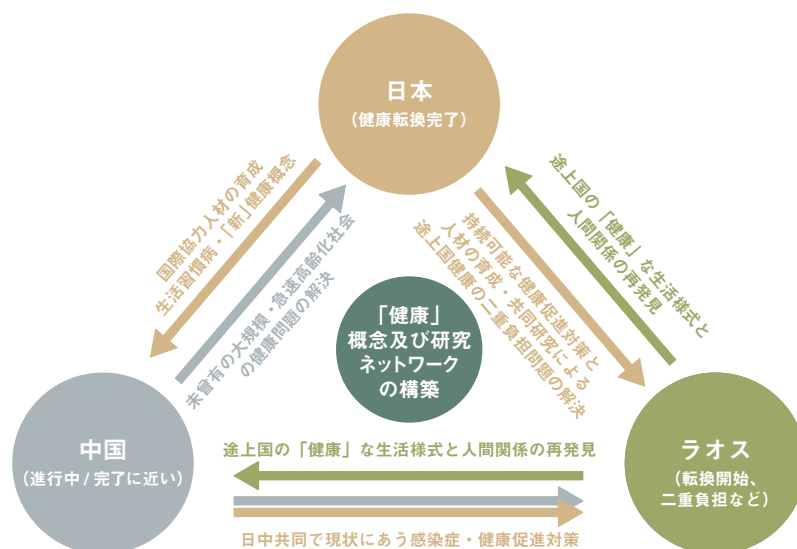
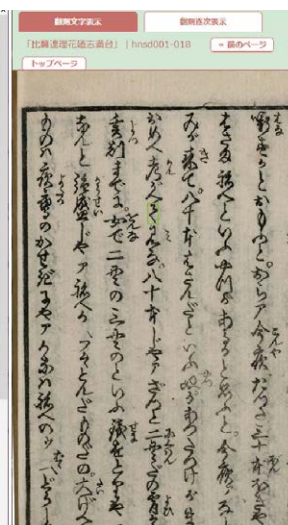
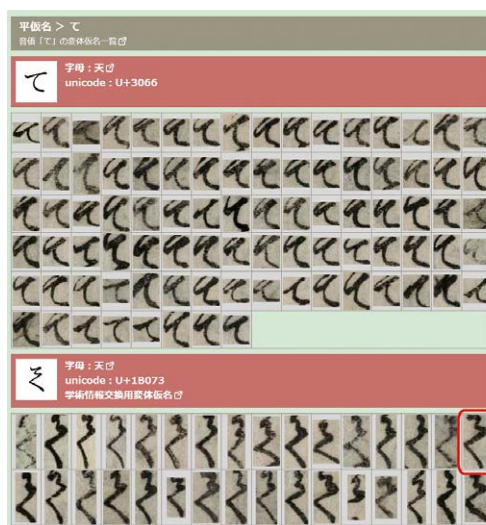


図1 日中ラ3者連携「健康研究」の構図



左上：新元号「令和」で話題になった奈良時代の『万葉集』から明治・大正時代の雑誌や教科書まで、日本語の歴史をたどる上で重要な資料を多く集めた『日本語歴史コーパス』(https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/)
左下：『日本語歴史コーパス』について解説する筆者 右：『総合書物学』プロジェクト国語研ユニットで作成した変体仮名の字形データベース

異分野融合で発展する研究インフラ 大規模コーパス構築の裏側

間淵洋子 ● 総合人間文化研究推進センター研究員・国立国語研究所 特任助教

2018年に設立70周年を迎えた国立国語研究所（国語研）では、設立以来、様々な地域・時代の日本語の実態を把握・記録し、多方面で役立つ資料として整備してきました。近年重点的に整備・公開を進めている、多様なコーパス（言語研究用のデータベース）は、今や研究インフラとして欠かさないものとなっています。コーパスの元となる資料は、講演などの発話、日常会話、現代語の書き言葉、Web上のテキスト、歴史的日本語資料、方言、日本語学習者の発話や作文など多岐に渡ります。

私は、2001年から『日本語話し言葉コーパス』の構築に参画し、その後『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語歴史コーパス』等の構築にも携わりました。いずれも、巨大なデータに対して短期間に一定の精度を保って研究用の情報付けを行う必要があり、これがなかなか難しいミッションでした。言語事象の徹底的な解明や正確な記述を希求しながら、効率的な作業と合理的・論理的な判断の元にコーパスの完成を目指すには、一般性や実用性も含め俯瞰で研究を見渡し位置づける「バランス感覚」が不可欠です。私はそれを、コーパス構築過程で自然言語処理や情報工学といった異分野の研

究者と多く関わることで培うことができたと感じています。彼らとの関わりは異文化交流であり、困惑しながらも手探りで歩み寄ることで、新たな世界が拓ける素晴らしい体験もありました。

現在参画する広領域連携型基幹研究「異分野融合による『総合書物学』の構築」では、従来の国語研コーパスのあり方と、原資料に寄り添った「書物学」、そして、連携機関である国立歴史民俗博物館や国文学研究資料館、国際日本文化研究センターの実施する歴史や日本文化によるアプローチとの融合を模索しています。言語と書物の関わりを解き明かす研究に資するコーパスの形を求めると共に、隣接分野の知見を積極的に取り入れ、一般社会や教育への還元を目指す応用研究も進めています。民間企業と共同開発している変体仮名の字形データベースもその一つです。開発には異分野との緊密性が極めて有用でしたが、連携機関が精力的に行っている異分野との共同研究にも触発される部分が大いにありました。

今後研究において重要なのは、異分野との融合や協業により、学際的に分野を発展させることだと、認識を強くしているところです。

大学間の連携枠組みを通して見えたもの

第17回北東アジア学術ネットワーク年次大会参加記

天皇華織 ・ 総合人間文化研究推進センター研究員・富山大学研究推進機構極東地域研究センター 特命助教

ネットワーク型基幹研究「北東アジア地域研究推進事業」富山大学拠点では、中国の中南林業科技大学、韓国の江原大学と連携し「北東アジア学術ネットワーク (Northeast Asia Academic Network; NAAN)」を形成しています。この枠組みのもと、毎年いずれかの大学において年次大会が行われています。2018年度は富山大学拠点において開催されましたが、2019年度は10月31日から11月2日にかけて江原大学にて第17回年次大会が開催され、「北東アジア地域研究推進事業」に携わるプロジェクトメンバーが参加しました。

現在、本拠点では「国際分業の進化と資源の持続可能な利用に関する研究」として、社会経済システムと自然環境システムの2つの視点を融合しながら、環境評価と資源ビジネスの可能性について政策提言することを目標として、特に鉄鋼産業に関する研究を進めています。そのため今年のNAAN年次大会では、これに関連した特別セッションを企画し、3名のメンバーがそれぞれ現在までの研究成果を報告しました。そのセッションにおいて私も、鉄鋼産業と気候の関係に着目

し、自然災害が及ぼす鉄鋼生産への影響に関して経済学の観点から行った研究について報告を行いました。

このような複数の大学による国際的な連携を長期的に継続していくことは、簡単なことではありません。私は、この年次大会に初めて参加して、大学間の連携とは、学術的な意見交換の基盤となる、その場にいる研究者同士の交流や、お互いを敬いながら行われる細やかなやりとりを通して、個人の信頼関係の上に構築されるものだと感じました。

「北東アジア地域研究推進事業」が属するネットワーク型基幹研究は、国内外の大学等研究機関とネットワークを形成して、多分野横断的な研究を行うことを重視しています。今後自らが「北東アジア地域研究推進事業」の国内の拠点間で連携して開催する研究会を組織する際や、より規模の大きな国際シンポジウムをオーガナイズする際にも、今回得た人脈と経験を活かし、対象地域への理解を深めるだけでなく、北東アジアを対象とする研究者同士の相互理解も深められるような会を開きたいと考えています。



NAAN 参加者による集合写真



セッションでの研究報告の様子



マーティン・チョウタリ研究所



震災後の村人による瓦礫の撤去作業

現地学術コミュニティとの協働

ネパール、マーティン・チョウタリ研究所とのつながり

伊東さなえ ● 総合人間文化研究推進センター研究員・京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 客員准教授

フィールドワークを通じて現地社会の生活や文化を理解する地域研究において、現地の研究機関・学術コミュニティとの交流は欠かすことのできないものです。ネットワーク型基幹研究「南アジア地域研究推進事業」(INDAS)でも、インドをはじめ南アジア各国の学術コミュニティとの共同研究を数多く行っています。特に、2017年度には、それまで年1回日本国内で開催してきたINDAS国際シンポジウムを、ネパール・カトマンドウで開催する試みがなされました。

当時、震災研究のための長期滞在中であった私も、このシンポジウムに参加しました。この国際シンポジウムは、ネパールの非営利人文系研究機関であるマーティン・チョウタリ研究所の協力のもと実施され、南アジア各国の登壇者による分野横断的な研究発表と討論が行われました。発表や討論からは、ネパールとも日本とも異なる、他の南アジアの視点を知ることができました。発表時間外の非公式な場における他地域研究者との交流からも新しい視点を得ました。例えば「地震で倒壊したのは多くが古い家だったが、新しい家の中でも倒壊するものもあった」と話したところ「建設会社や行政に対する訴訟にはならないのか」と、あるインド研究者から質

問されました。普段、ネパールでフィールドワークをしている中では出てこない視点であると感じました。

マーティン・チョウタリ研究所は、2015年に震災が起きるとすぐに調査チームを結成し、当年中に調査レポート“Courage in Chaos”を出版するなど、現代ネパールで生じる多様な事象に多角的に取り組んでいます。この研究所とINDASとは、国際シンポジウム後も交流を続けています。INDASに関わる研究者は、フィールド調査時に研究所を訪問します。私自身も、ネパールで調査する際は訪問し、震災の調査に関わった研究者に助言を求めたり、関連する研究会に出席したりしてきました。最近では、1980年代に日本の支援で作成されたネワール民族(ネパールの少数民族)の言語の辞書の作成過程を、文化の創造という観点から再考察する日ネ研究者による共同プロジェクトが企画されており、私もメンバーとして参画する予定です。日本国内でもマーティン・チョウタリ研究所紹介のネパール人研究者による研究会を実施しています。さらに、国際シンポジウムに基づく書籍出版も企画されているなど、つながりは現在も発展し続けています。

きざし通信

SYMPOSIUM

「ヨーロッパにおける 19 世紀日本関連在外資料調査研究・活用」

人文機構シンポジウム

海外で《日本》を展示すること

— KIZUNA 展からその意義を探る

本プロジェクトが進めている博物館展示を通じた日本文化発信の新たな取組について、その意義と課題を国内研究者や市民とともに考えるシンポジウムを開催した。ウェールズ国立博物館デイビッド・アンダーソン館長を特別講演者として迎え、2017年にウェールズにおいて開催した国際連携展示の実践例や海外における在外資料調査の現状について報告を行い、会場との質疑応答により議論を深めた。



2019年10月5日
場所：東京大学本郷地区キャンパス

MUSEUM

機関拠点型基幹研究

「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」

展覧会

草の根のアル・ヌーヴォー

明治期の文芸雑誌と図案教育

本展は、人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」の助成を受け、京都工芸繊維大学美術工芸資料館と国際日本文化研究センター等の所蔵品より、京都高等工芸学校（1902年創立）の図案教育資料、幻の挿絵画家・一条成美（1877-1910）の作品を含む『明星』や『新聲』等文芸雑誌の表紙絵・挿絵資料、併せて160点あまりを展示した。



2019年10月28日-11月22日
場所：京都工芸繊維大学美術工芸資料館

SYMPOSIUM

「南アジア地域研究」

第11回INDAS全体国際シンポジウム

「現代南アジアにおける生老病死」をテーマとして、第11回INDAS全体国際シンポジウムを開催した。欧米や南アジアからの招聘者を含む16名の研究者による多岐に渡った報告が行われ、熱い議論が繰り広げられた。このシンポジウムの成果はRoutledge社のNew Horizons in South Asian Studiesシリーズから論文集として刊行予定である。



2019年12月14-15日
場所：龍谷大学大宮学舎

MUSEUM

「北東アジア地域研究」北海道大学拠点

博物館展示リニューアル

国境観光：世界はボーダフル

本拠点は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニットと協力し、国境観光の記録や成果を同大学博物館で展示している。現在の展示のテーマは「国境観光：世界はボーダフル」。これはブックレット・ボーダーズ No. 6『世界はボーダフル』（2019年7月刊行）の内容と連動しており、北米メキシコ国境編、北東アジア編、欧州・中東編について写真入りで解説している。



BOOK

「アジアにおける『エコヘルス』研究の新展開」

国文学研究資料館ユニット

医学・科学・博物 — 東アジア古典籍の世界

陳捷 編 勉誠出版 2020年2月刊行

東アジアにおける医学を中心とした科学的な知がどのように展開したかを探る共同研究の成果として、古代から近代までの日中韓越を視野に入れた意欲的な19本の論稿を収めている。様々な知が中国に派生し周辺諸国に伝播したという従来の考え方を覆し、双方向的に影響を及ぼしながら発展したことを明らかにした。細分化された研究の現状に一石を投じる画期的な論集である。



画像は『毛詩品物図攷』（国文学研究資料館所蔵）

DATABASE

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

国立民族学博物館ユニット

津波の記憶を刻む文化遺産

— 寺社・石碑データベース

本データベースは、過去の災害の教訓を生かすため建立された津波碑や避難所の役割を果たしている寺社の情報とその所在地を示したものであり、さまざまな参加者が協力しながら情報を充実させることを特徴としている。2017年の公開から91件のデータが新たに追加された。このような活動を通して日常的な防災の意識が高まることを願っている。



<http://sekihi.minpaku.ac.jp/>

第2回アジア・エコヘルス研究フォーラム

ポスト健康転換時代の「健康」構築に向けて

蒋 宏偉

総合人間文化研究推進センター研究員・総合地球環境学研究所 特任助教

2018年度の第1回フォーラムに続き、第2回アジア・エコヘルス研究フォーラムが、2019年11月14日・15日の2日間、中国海南省海口市において開催されました。今回のフォーラムは、広領域連携型基幹研究「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」、中国海南省疾病予防管理センター及び中国生態学会（生態健康と人類生態専門委員会）の3組織が共同企画した国際研究集会であり、日本・中国・ラオス・ベトナム・シンガポール・カンボジア・タイ・パキスタン・ネパール・シエラレオネ・国際家畜研究所（ILRI）の10カ国1国際組織から約160名の研究者及び実務者が出席し、研究発表や交流を行いました。

このフォーラムでは、基調講演に続き、メインテーマの「ポスト健康転換時代の健康促進と疾病予防」をめぐる、「熱帯感染症予防管理の成功と挑戦」、「アジア・エコヘルス研究の現状と保健政策」、「エコヘルス研究の最前線と未来可能性」、「他山の石」という4つのセッションが企画され、最後に総合討論が行われました（「健康転換」の概念について詳しくは、本誌5ページをご覧ください）。

基調講演において、中国予防医学会の副会長梁堯峰氏、国立環境研究所の理事長渡辺知保氏、海南省疾病予防管理センターの副主任陳言氏らが、重要なスピーチを行いました。特に、渡辺氏の「アジアにおけるポスト健康転換時代の健康挑戦」と題する講演では、「環境と疾病」の視点から、「伝統」感染症から脱出しつつあるアジアの国々において、「エコヘルス」アプローチの重要性を訴えました。また、熱帯感染症及びエコヘルスのセッションにおいて、各国の研究者は、アジア各地の感染症と生活習慣病に対するエコヘルスのアプローチについて、最新の研究成果を発表しました。本プロジェクトと海南省疾病管理センターの連合チームも、生活環境と健康に関する共同研究の成果を紹介しました。

2018年度の第1回に続き、第2回フォーラムも成功裏に終わり、参加者数や参加国、演題数は、いずれも第1回を大きく上回りました。総合討論では、各国の代表がエコヘルス研究、及びフォーラムの継続開催の重要性について強調しました。共同主催3機関の関係者は、2020年度の第3回以降もフォーラムを定期的開催できるように、努力を続けています。



第2回アジア・エコヘルス研究フォーラムに出席した各国の代表たち



プロジェクト代表ハイン・マレーによる講演

国 内外の大学等研究機関や地域との組織的連携や、研究者ネットワークの構築を通じて、より広く多様な視点から現代的課題の解明に取り組む国際共同研究を進めています。中国・韓国・日本において開催された3つの国際シンポジウムと、ドイツの博物館における日本文化に関する展示について報告します。

多様な「近代」のあり方を考える

「北東アジアにおける『近代』空間の形成：帝国と思想」国際シンポジウム

李 曉東 島根県立大学北東アジア地域研究センター センター長・北東アジア地域研究島根県立大学拠点 拠点長

李 正吉 総合人間文化研究推進センター研究員・北東アジア地域研究島根県立大学拠点 特任助教

ネットワーク型基幹研究「北東アジア地域研究推進事業」島根県立大学拠点は、2019年10月5日、ソウル国立大学アジア研究所との共催で、ソウルにて、国際シンポジウムを開催しました。

島根県立大学拠点は、「北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響」をスタートしてから4年目を迎えています。これまで1年目には「胚胎期の諸相」、2年目には「胎動期の諸相」、そして3年目には「近代の始動」というテーマで、国内外の研究者とともに共同研究を行ってきました。17世紀から19世紀へという時間軸に加え、「統治理念」、「制度」、「交流」という3つの軸に沿って、北東アジアにおける多様な近代的空間の形成の諸相や各地域のあり方を歴史的・文化的・思想的観点から分析し、当該地域が持つ特性＝アイデンティティの抽出を試みています。

その延長線上にある4年目の今年は、国際シンポジウムを「北東アジアにおける『近代』空間の形成：帝国と思想」というタイトルで開催し、ソウル国立大学アジア研究所とともに「近代化」、「ナショナリズム」、「植民地支配」などをキーワードに、北東アジア地域における多様な近代化について考察しました。北東アジアは、清朝・ロシア帝国・大日本帝国という3つの重層パワーの影響を色濃く受けた地域です。私も、このシンポジウムにおいて、朝鮮末期の民主主義の土壌づくりの過程について、政治学の観点から発表しました。その他6本の発表とそれに続く議論の結果、タイムラグを伴って、北東アジアの社会に様々な形で浸透した「近代」が、既存の歴史的文化的伝統に対して、どのような影響を与えたか、また、北東アジアの各国が近代化の受容と抵抗を通してどのように変容を遂げたのかを検討することができました。

このシンポジウムでは、対象地域として、日本と韓国（19世紀朝鮮）だけではなく中国、モンゴル、台湾をカバーしました。日韓両国の各地および台湾の研究機関から集まった報告者や討論者と幅広い学問的交流を行っただけではなく、島根県立大学拠点の新たな研究協力機関開拓の土台も構築することができ、非常に実りの豊かなシンポジウムとなりました。来年度以降も、国際的な研究協業体制を強化していく予定です。



議論の様子

ソウル大学アジア研究所、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、島根県立大学NARSセンター 共同主催

北東アジアにおける『近代』空間の形成：帝国と思想

2019. 10. 5(土) 10:00-19:30
ソウル大学アジア研究所303号

10:00-10:20 (司会：洪宗範)
開会の辞：朴秀鍾（ソウル大学アジア研究所所長）
趣旨説明：李曉東（島根県立大学北東アジア地域研究センター長）

10:20-12:35 (司会：張貴性)
山本健三（島根県立大学）朝鮮における「アナーキズム」の近代：20世紀初頭の北東アジアにおけるクロボトキン主義の拡大と「朝鮮革命宣言」
李慶遠（東京大学）1920年代の植民地朝鮮における「生の政治言説」
李正吉（島根県立大学）朝鮮末期の民主主義の胎動に関する諸考察：「民主主義の土壌づくり過程」の理論化に向けて

14:00-15:30 (司会：井上治)
金仁淑（韓国大学）日本軍の対ソ連情報思想戦：朝鮮軍と関東軍の事例とその含意
青木雅治（東京大学）モンゴル人民共和国建国期の政治事件と国際情勢

15:50-17:20 (司会：石田徹)
文明基（筑波大学）台湾、朝鮮の植民地史の比較研究：警察及び警察補助機関を中心に
黄克武（清华大学）近代中国の「中国本部」意識の言葉の意味転換と近代中国の国家の形作り

17:20-17:30 (司会：洪宗範)
閉会の辞：李曉東（島根県立大学北東アジア地域研究センター長）

盧智汎（ソウル大学客員教授）	李曉東（島根県立大学）
金正仁（徳川教育大学）	金平来（韓国国際大学）
岡本真希子（東山大学）	李麗玉（朝鮮大学）

10 ONLINC 人間文化研究機構 島根県立大学

シンポジウムのポスター



ミュンヘン五大陸博物館におけるシーボルト展

日高 薫

国立歴史民俗博物館 教授

ドイツ人の医師・博物学者で19世紀に2度にわたり来日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796-1866)は、江戸時代の日本に近代的な医学を伝える一方で、日本研究に勤しみ、動植物などの自然から生活文化に関わる膨大な資料を収集してヨーロッパに持ち帰りました。このうちミュンヘンの五大陸博物館には、シーボルトが2度目に来日した1859年から1862年にかけて収集され、彼の死後バイエルン州によって購入された6,000点を超える民族学資料が所蔵されています。

ネットワーク型基幹研究「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」においては、2010年から2015年にかけて推進したシーボルト・コレクションの総合的調査研究の成果をもとに、「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展を企画し、国内5会場を巡回しました。2016年度から2017年度にかけて開催されたこの巡回企画展は、日本国内はもちろんのこと、海外の諸機関からも高い評価を受け、その結果、コレクションの所蔵者であるミュンヘン五大陸博物館で凱旋展示ともいえる展覧会の開催が、このたび実現しました。

2019年10月11日から開催中の「Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten (日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国)」と題する企画展示は、日独の共同調査プロジェクトによって新しい価値を付与された当該コレクションを、現地ドイツで初めて展示公開するものであり、五大陸博物館でも長らくまとまって展示される機会のなかったシーボルト・コレクションを本格的に紹介する大規模な企画展として注目されています(会期は2020年4月26日までの予定)。出品されている約300点の資料は、日本側の調査者によって選ばれたもので、日本で開催された展示の内容をふまえて、その後の調査によって得られた研究成果を反映させ、ドイツの観覧者を対象とするに相応しい新たな展覧会として再構成されています。プロジェクトでは、国際連携による調査研究を、在外日本資料の現地における活用へと結実させる試みを、今後も続けていきます。



展示場風景



漆工品の展示コーナー



展覧会ハンドブック表紙

新たな成果が際立った国際シンポジウム

バチカン図書館および大分県との協業

太田尚宏

国文学研究資料館 准教授

ローマ教皇の来日に先立つ 2019 年 10 月 26 日、大分市にて、国際シンポジウム「マレガ収集日本資料の発見と豊後キリシタン研究の新成果」が開催されました。ネットワーク型基幹研究「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」が大分県教育委員会と共催したこのシンポジウムにあわせて、バチカン図書館のチェザーレ・パシーニ館長、アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン資料修復室長が来日。さらに国文学研究資料館（国文研）のロバート・キャンベル館長も登壇するとあって、会場は超満員の盛況ぶりでした。

シンポジウムは 2 部構成で、前半には、パシーニ氏「バチカン図書館所蔵のマレガ資料：過去から未来へ人々の間に架け橋を築く」、ヌーニェス＝ガイタン氏「バチカン図書館におけるマレガ・プロジェクト－相互理解と協業の体験－」、キャンベル氏「マリオ・マレガ神父と日本資料コレクション」という 3 つの講演が並び、後半は、佐藤晃洋氏（大分県立高田高等学校）「禁教初期における臼杵藩のキリシタン政策」、三野行徳氏（国文研）「臼杵藩宗門奉行と類族制度」という研究発表、これに平井義人氏（日出町歴史資料館）「臼杵藩領キリシタンの〈数〉と〈広がり〉」、大津祐司氏（大分県立先哲史料館）「寛永 12 年の『南蛮誓詞』について」、大友一雄氏（国文研）「マリオ・マレガ資料データベースの開発と可能性」という 3 つのコメントが加えられました。

マレガ氏の日本資料コレクション全体を俯瞰したうえでバチカン図書館のマレガ資料を定置し、今回のプロジェクトによる協業の意義に言及した 3 講演、さらにはマレガ資料を活用した通史的研究に加え、調査過程で得られた新たな論点を際立たせた 3 本のコメントによって、マレガ資料の世界がよりクリアで立体的に示されました。

なお、大分県立先哲史料館では秋季企画展「大分のキリスト教史」も開催され、特別出品された東京国立博物館所蔵の踏絵の横には、マレガ資料で初めて明らかになった臼杵領内の絵踏巡回ルートがパネルで図示されました。研究成果がいち早く展示に取り入れられ、可視化されたといえましょう。



シンポジウムの様子



企画展のマレガ・プロジェクトのコーナー



講演の打合せをするヌーニェス＝ガイタン氏

研究を はぐくむ

江戸時代の絵入百科事典を現代につなげる

地域におけるアウトリーチと情報発信

石上阿希

総合人間文化研究推進センター研究員・国際日本文化研究センター 特任助教

我が国最初の絵入百科事典は1666年の序をもつ『^{きんもうずい}訓蒙図彙』とされています。編纂者の中村^{てきさい}惕斎は自分の子どものために、絵と言葉で森羅万象を知ることができる書物を作りました。本書は子どもだけでなく大人や外国人にも便利な書物として重宝されました。広領域連携型基幹研究「異分野融合による「総合書物学」の構築」の国際日本文化研究センター（日文研）ユニット「文化・情報の結節点としての図像」では、近世から明治初期にかけて出版された絵入百科事典を中心に、図像を媒介にした情報伝達・文化交流を研究し、様々なかたちで社会発信を行っています。

その一つが公開講座や出前授業です。2017年度には、日文研のすぐ隣にある桂坂小学校で6年生を対象に「江戸時代の絵入百科事典」と題した授業を行いました。例えば「きりん」という言葉が指す動物について『訓蒙図彙』に載る神獣の麒麟と今の私たちが考える首の長いキリンとは違うものだということを示し、「絵」と「言葉」から今と昔を考える面白さを伝えました。子どもたちからは「江戸時代の本に興味を持った」などの感想がよせられました。また、2019年度には立命館大学アカデミックセンターにて3回にわたって講座「『絵入百科事典』で読み解く江戸の暮らし」を開き、毎回90名ほどの熱心な受講者が集まりました。各回では、『訓蒙図彙』の制作背景と受容の様相、近世期の身分・階層を分類・図解した書物、海外に渡った絵入百科事典と異文化の交流について語りました。

もう一つの発信はデータベースです。2017年度より「近世絵入百科事典データベース（試作版）」の公開をスタートしました。調べたい事物の名称がわからなくてもたどり着けるように、「天文」や「人物」など分類毎に絞り込みができるようにし、トップページには全項目のサムネイルを表示して、「目」での検索も可能にしました。ありがたいことに、フランスの研究者からくずし字の教育に活用しているという声も届きました。くずし字の理解とともに事物の名称と姿形が一度に覚えられるという点も学習の便がよいのだと考えます。試作版のデータベースは来年度以降、コンテンツを拡充して大幅リニューアルする予定です。絵入百科事典があらゆる人にとって便利な書物であったように、本データベースも現代の人々にとって古典籍や江戸文化への入り口となることを目指します。



桂坂小学校での出前授業：『訓蒙図彙』を使って解説



立命館大学アカデミックセンターでの一般向け講座：講座の後は質問の手が次々とあがった



近世絵入百科事典データベース（試作版）のトップページ：キーワードを入れなくても絵から探すことができるようにサムネイルを並べた

若手研究者の支援・育成や、連携大学との協力による研究成果をもとにした教育プログラムの作成等の、「研究をはぐくむ」活動を行っています。そのなかから、小学校における出前授業や、大学生や留学生が企画したイベント、GIS（地理情報システム）講習会をとりあげます。

大学生が伝える、現地で学んだ中東文化のいま

企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」関連イベントを通じて

縄田浩志

秋田大学大学院国際資源学研究科 教授・国立民族学博物館 特別客員教授

企画展『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年―「みられる私」より「みる私」』が、2019年6月6日－9月10日に国立民族学博物館にて、10月5日－12月22日に横浜ユーラシア文化館にて開催されました。ネットワーク型基幹研究「現代中東地域研究推進事業」が協力した本企画展示の学術的価値は、中東における文化人類学的・人文地理学的研究を切り拓いた先駆者である片倉もとこによる貴重なフィールド資料を活かして、半世紀後に同地域で実施した再調査の最新研究成果の提示にありました。と同時に、展示関連イベントを通じて、現代日本における「イスラーム」、「中東文化」、「女性」について新たな理解をどのように醸成していけるか、という挑戦の機会でもありました。

関連企画イベント「遊牧民のテントでアラビア文化を体験！」（10月29日－11月4日、横浜ユーラシア文化館開催）では、設営したサウジアラビアのテントでアラビアコーヒーとナツメヤシ果実デーツを提供し、サウジアラビアからの留学生の協力も得て、アラブ流もてなしを再現しました。コーヒーの試飲というつつきやすさが良かったのか、1週間で1,500人以上の方々にくつろぎのひとときを体験していただきました。これまで接する機会がなかったサウジアラビア人と直に会話できたことを印象深く感じた人が多かったようです。

ほかにも、その直前に大学カリキュラムの一環としてサウジアラビアでフィールドワークを1カ月弱行った秋田大学の学部生が企画したイベント「サウジアラビア女性の夜会を体験しよう！」を開催しました（写真）。サウジアラビア未訪問の方々や遊牧文化に興味を持ち始めた学生の耳目を集め、告知後すぐに定員に達しました。その内容は、学術的には必ずしも精度が高くない情報や未熟な認識が含まれていたことも事実ですが、参加者は好意的に接していただき、臨場感溢れる異文化体験を楽しんでいただいたようです。次世代の中東地域研究者の育成という観点からは、中東各地でのフィールド研究が政情不安定から困難になりつつあるなか、サウジアラビアで貴重な現地経験をした日本人学生と日本に留学中のサウジアラビア学生という両国の若い世代の感性を通じて、日本社会における中東理解が一段と深まったことを確信することができました。



1960年代に片倉もとこが記述した夜会の様子と比較しながら、20名ほどの一般女性参加者にサウジアラビア現地の衣装やお香について解説し、アラブ流もてなしを再現した（横浜ユーラシア文化館、11月2日）



南アジアセミナーにおけるGIS講習会 異なる研究分野の研究ツールに触れる

関戸一平

総合人間文化研究推進センター研究員・東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構 特任研究員

GIS（地理情報システム）は位置情報を持ったデータを整理・解析するためのシステムで、地域研究においても、マクロな統計の空間分析からミクロな村落調査まで幅広く活用が期待できるツールです。今年度の南アジアセミナー*（2019年9月17 - 19日、於広島大学）では、新しい取り組みとしてセミナー参加者のうちGIS初学者を対象としたGIS講習会を開催しました。セミナー受講生だけでなく、運営側のセンター研究員たちや講師の一部も受講しました。GISの基本的な考え方や用語解説の講義に続いて、GISソフトウェアQGISを実際に触って、受講生自身の研究データを効果的に地図上に表現する手法を実習しました。また、後日より深く学びたい方のために、自習用の教材などの紹介にも重点を置きました。

南アジアセミナーで従来の大学院生の研究発表や講師による講義に加え、GIS講習会を企画したねらいとしては、新たな研究ツールを使って受講生の研究の深化につなげるだけでなく、他分野の研究への理解を助けるということがありました。GISに限らず、自身の研究分野であまり普及していない研究ツールにふれる機会は多くなく、そのようなツールが使われている研究はブラックボックスのように見えてしまいます。分野をまたがる地域研究の研究交流においては、そのブラックボックスを少しでも透明にすることが重要で、南アジアセミナーのような研究合宿はその場として適していると実感しました。

今回の講習会について、大変嬉しいことに参加者から広く好評の声が届きました。来年度以降も南アジアセミナーでは何らかの講習会をプログラムに組み込む方向で検討中です。また、ネットワーク型基幹研究「南アジア地域研究推進事業」東京大学拠点（TINDAS）では、人文社会系の大学院生・若手研究者を対象としたGIS講習会を不定期に開催しており、今後も継続していく予定です。

*南アジアセミナーは「南アジア地域研究推進事業」（INDAS）が毎年度開催している合宿形式の若手セミナーです。詳細は「研究をはぐくむ場としての「南アジアセミナー」『きざし』vol.2やINDASのホームページ（<https://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp>）をご覧ください。



GIS講習会の様子



南アジアセミナーのポスター

研究を ひらく

出版や展示、国際発信等により、広く社会に向けて「研究をひらく」こと、そこからのフィードバックを活かした研究の高度化を進めています。2019年度の活動のなかから、日本の地域文化及びハワイの歴史に関する2つの展示と、国際学会におけるパネルについて紹介します。

アクション・リサーチの一環としての展示活動

特集展示 よみがえる地域文化 ―岐路に立つ^{コミュニティ}共同体のいま―

葉山 茂

総合人間文化研究推進センター研究員・国立歴史民俗博物館 特任助教

地震や津波、台風などによる災害は、その規模の多寡によらず地域の存続に影響を与えてきました。また、過疎・高齢化という現代の社会現象も、一見異なる事柄のようでありながら災害同様に地域や地域文化の存続を危うくしています。

災害や過疎・高齢化に直面した人びとは、それをどう乗り越えていけばよいのでしょうか。それを考えるきっかけとして2019年7月23日 - 11月4日の会期で、国立歴史民俗博物館（歴博）にて、特集展示「よみがえる地域文化―岐路に立つ^{コミュニティ}共同体のいま―」を開催しました。この展示では、広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の歴博ユニットが、過去3年間に進めてきた研究成果を公開しました。

歴博ユニットではアクション・リサーチという手法を採用しています。この手法は研究者が調査を通じて知ったことを展示や市民講座を通して公開し、そこからレスポンスを得て新たな課題を発見し、解決方法を探る研究モデルです。歴史研究拠点の構築や地域文化の再創造には過疎・高齢化や災害の状況のなかでの経緯など、その時々課題に対する理解が不可欠です。また地域文化の存続・継承をめざすには、研究者は市民と協働する体制をつくることが求められます。

展示では2011年の東北地方太平洋沖地震による津波で被災した宮城県気仙沼市の旧家・尾形家住宅の資料を中心に、2018年の西日本豪雨の被災地である愛媛県宇和島市吉田町、過疎・高齢化する山村で豪雨災害の経験もある福島県只見町、岩手県岩泉町の資料を展示しました。

尾形家資料については2011年に文化財レスキューに参加してから8年にわたって気仙沼市教育委員会、市民と協力して資料整理を続けてきました。その過程で多くの聞き取りを行ない、住居に残された被災物は単なる物質ではないことを再確認しました。その経験を踏まえて救った守札や薬箱を通してみえる地域や外部社会との交渉の有り様を再現したほか、年中行事の再現なども試みました。今回の展示はいずれの地域からも遠い場所での開催となりましたが、今後は各々の地域の問題をその地域において展示し、地域と共に考える体制をつくりたいと考えています。



特集展示の展示風景



守札の分析から信仰を通じた社会関係の広がりを知ることができる



再現した正月飾り：尾形家住宅では正月1日と小正月の15日、31日の3回に分けて正月飾りをつくってきた



「移民史」の可能性と構想力

企画展示 ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち

原山浩介

国立歴史民俗博物館 准教授

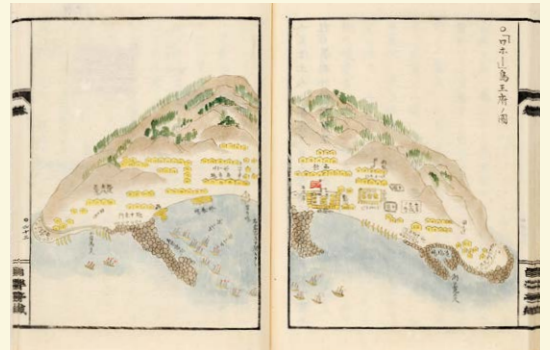
本展示のなかで、シカゴ学派の流れを汲む社会学者、ロマンゾ・アダムスらによる1930年のハワイの地図を紹介した（展示図録p131、p132に掲載）。エスニック・グループ毎に作られた、ホノルルの人口分布を示すこの大きな地図が意味するところは、ハワイを人種の共生の実験場にしようという、高みからのまなざしである。同じくシカゴ学派のハワイ大学の研究者、アンドリュー・リンドは1946年に、戦争が、独自の社会を形成しがちだった日本人・日系人に対して、ハワイの社会への広く深い関わりを促したと評価した。

帝国としてのアメリカ合衆国を立脚点に辺境を観察しようとする不遜さや、帝国や資本主義というものの存在を所与のものとして、その構造に奉仕するかのような評価のあり方は、それ自体として批判される必要がある。しかしその一方で考えてみなければならないのは、帝国と資本主義が太平洋を収奪する構図のさなかで、日本人移民・日系人が一定の「役割」を、結果として担わされながら、ネイティブハワイアンの地に踏み込んでいるということである。実は、上記の地図と、ハワイの日本人・日系人と太平洋戦争の関係についての「評価」には、この問題が抜きがたく潜在している。

こう考えた時、私たちは、「移民」という用語を無造作に使い続けて良いのかを問わねばならない。過去に日本から海外へ、出稼ぎ／移住のために向かった人びとを、それぞれの行き先の背景、国際／世界情勢を抜きに、一様に「移民」と呼んで良いのか。そして、「帝国と資本主義」というよりは、「グローバリゼーションと新自由主義」が展開する21世紀において、日本を含む様々な社会が遭遇する「人の移動」を、留保なく同じ「移民」という言葉で括って良いのか。

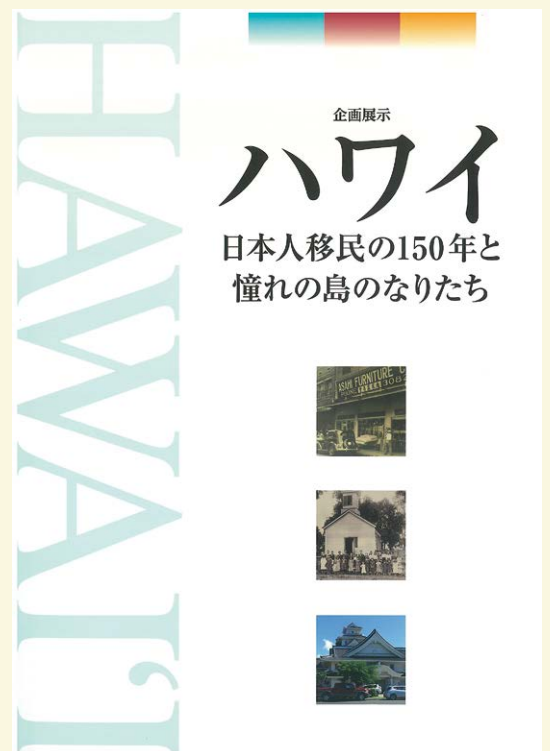
そうした点を考える上で、「移民資料（論）」は、単に海外に渡った日本人を跡づける調査・資料収集では済まされない。過去と今日において対峙すべき課題を見逃さず、むしろそれへの感性を呼び覚ます、触発する「移民史」の構想へと展開する基点である必要がある。

今回の国立歴史民俗博物館での企画展示そのものは、日本からハワイへの移住とハワイの歴史がわかるように構成した。展示のなかに、いわば「痕跡」と「問い」として埋め込んである論点を、どのように課題として復元し、それに向き合うのが、今後の研究において問われると考えている。



著者 卷之一 1849年 国立歴史民俗博物館蔵

1838（天保9）年に遭難した次郎吉の体験をまとめたもの。写真は、収録されているオアフ島の地図。中央右よりにある宮殿が、現在のイオラニ宮殿である。この当時のハワイ王国は、アメリカ合衆国ではなく、イギリスによる支配にさらされており、当時のカメハメハ三世は、立憲体制を整え、独立を保とうとした。ここから数十年の間に、多くの日本人移民がハワイに押し寄せ、そしてハワイがアメリカ合衆国に組み入れられることになる。なお、本資料は展示のなかで、日本からハワイへの移住の、いわば「前史」として展示したものである



企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」展示図録 国立歴史民俗博物館、2019年10月刊行

会期：2019年10月29日～12月26日 場所：国立歴史民俗博物館
※本展示はネットワーク型基幹研究「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」の一環として実施したものである

交流の場としての海と船と港

第22回国際比較文学大会においてパネル実施

根川幸男

国際日本文化研究センター 機関研究員

2019年7月29日 - 8月2日、マカオ大学において、第22回国際比較文学大会 (XXII Congress of The ICLA) が開催されました。本大会にネットワーク型基幹研究「日本関連在外資料調査研究・活用」(以下、在外プロジェクト)の「プロジェクト間連携による研究成果活用」班代表である稲賀繁美(国際日本文化研究センター教授)、同班班員の根川幸男(同機関研究員)が参加し、在外プロジェクト関連テーマで報告を行いました。これは、本大会の3日目、国際海洋都市と船舶が文化の接触において果たした役割をテーマとしたパネルのなかで実施したものです。稲賀はL. ヴァン・デル・ポストとW. プルマーという、アパルトヘイト期南アフリカの2人の若手作家の日本への航海について、そして根川は太平洋戦争直前の日本からブラジルへの移民船による日本・満洲国・ブラジル間の動植物外交について報告を行いました。これらの報告の要旨は、「プロジェクト間連携による研究成果活用」ウェブサイト(zaigai-sokatsu.rspace.nichibun.ac.jp/2019-8-22-)に掲載しましたので、そちらをご覧ください。

今回の報告は、2019年2月に長崎県平戸市において他の在外プロジェクトと連携して開催した国際シンポジウム「国際海洋都市平戸と異文化へのあこがれ—在外資料が変える日本研究」の成果をふまえたもので、在外資料を通じ、国際海洋都市を核とした、人・船・海洋・史資料の関係史というテーマの延長線上に位置づけられるものです。これはまた、研究成果活用班の「日本研究における国内学界と国外学界との相互交渉を推進し、従来の学界の枠組みを超えたネットワークの創出を目指し、「新領域創出」への基盤構築に資する」という目的とも一致するものと考えられます。

加えて、開催地マカオは、平戸と同じく、国際海洋都市としての歴史が古く、東西の交流・交易の舞台となってきました。海と船によって流通した人やモノや史資料の関係史を論ずる場として最適であったと言えます。同地訪問の機会を利用して、マカオ海事博物館での調査も行いました(図1)。

今回のパネルや調査の成果を、2020年度以降に公開を予定している「在外日本関係資料の伝播経路マップ」作成など、在外プロジェクトの今後の活動の展開につなげていきたいと思います。



図1 マカオ海事博物館の「中華及東南亜諸島地図」(『東印度水路図』1596)。16世紀末期の東アジアと東南アジアの地図で、伝説的な海獣たちとともに、港市名や島名が克明に描かれていて、当時のヨーロッパ人の海洋観を考える上で興味深い



ICLAで報告する稲賀教授



ICLAで報告する筆者

資料保全のネットワーク構築と大学間連携の展開

天野真志 総合人間文化研究推進センター研究員・国立歴史民俗博物館 特任准教授

「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」(以下、歴史資料保全 NW)は、国立歴史民俗博物館(歴博)を主導機関として、災害時を含めた資料救済活動の展開と地域資料を活用した地域研究の促進を通して、地域社会における歴史文化の継承と創成を目指しています。人間文化研究機構と東北大学・神戸大学が中心拠点となって進めるこの事業では、全国各地の大学や、「資料ネット」と総称される地域の資料保全活動との連携を強化し、各地域における精力的な資料保全活動を幅広いネットワークで協力する大学間連携を進めていきます。

2018年度、歴博は福島大学と包括協定を締結しました。その一環として、福島大学が開講する「コア・アクティブ科目：これからの地域と歴史・文化遺産」に協力し、7月13日に筆者が「地域の歴史文化を共有すること」として講義をおこないました。各地の大学では、地域との関わり方やそこに残された様々な資料の扱い方に関する教育活動をおこなっています。これまでも歴史資料保全 NW では、ふくしま史料ネットが実施する夏期の集中資料整理作業をとおして福島大学と連携してきましたが、これからもこうした教育実践を通じた連携を進めていきます。

12月22日には、名古屋大学大学院人文学研究科との



大学フォーラムのワークショップで講演する筆者



大学フォーラムのシンポジウムの様子

共催により、「地域歴史文化大学フォーラム in 名古屋：地域資料保全のあり方を考える」を名古屋大学にて開催しました。このフォーラムでは、第1部に筆者が講師としてワークショップ「資料の緊急対応を考える」を実施し、緊急時における資料の取り扱いについて議論しました。第2部ではシンポジウム「歴史文化の保存・継承と防災対策—東海資料ネットの設立に向けて—」を開催し、東海地域における資料保全の基盤構築に関して議論をおこないました。先行する他地域の事例を踏まえて議論された本シンポジウムには約160名が参加し、南海トラフ地震に備えるべく「東海資料ネット」の設立と展開に向けた活発な議論が繰り広げられました。本事業では、このフォーラムを契機に立ち上がった「東海資料ネット」と連携して東海地域における資料保全を進めるとともに、これからも多くの地域と連携を強化し、ネットワークのさらなる展開を目指していきます。



福島大学における夏期集中作業



19 世紀イタリア楽壇における日本への眼差し ローマ・ナポリ・フィレンツェでの調査を終えて

光平有希 総合情報発信センター研究員（人文知コミュニケーション）
国際日本文化研究センター 特任助教

若手研究者

海外派遣

プログラム

総合人間文化研究推進センターは、基幹研究プロジェクトにおける国際連携の推進や、国際的視野を備えた研究者養成を目的として、各プロジェクトに参画する若手研究者を海外の研究機関に派遣しています。本プログラムの派遣者の報告をお届けします。

派遣先

Sapienza University
of Rome

ローマ大学ラ・サピエンツァ

派遣期間

2019.8.18 - 9.19

2019年8月中旬から9月中旬にかけてのおよそ1ヶ月間、ローマ大学ラ・サピエンツァを拠点に日本表象西洋楽曲の調査研究をおこないました。

国際日本文化研究センター（日研）の機関拠点型基幹研究「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」に属する「外書の研究」プロジェクトでは、これまで日本開国期以前に西洋人が日本について著した日本関係欧文図書や西洋古版日本地図を主たる対象として研究を進めてきました。近年では、並行して開国期前後に日本を題材として作られた西洋の音楽作品（日本表象西洋楽曲）の収集・研究にも着手しています。今よりも格段に日本に関する情報が限られていた時代、西洋人はどのように音楽で日本を表現し、それを民衆はどのように聴いていたのか——。新しい切り口からの日本関係欧文史料研究・大衆文化研究の深化を目指しています。

今回の研究拠点であるイタリアにおいて、日本をイメージして作られた音楽作品といえば、マスカーニの《イリス》Iris (1898) や、プッチーニの《蝶々夫人》Madama Butterfly (1904) といったオペラ作品を思

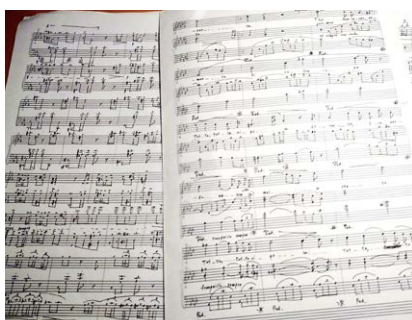
い浮かべられる方も多いかと思います。しかし実は、それ以前のイタリアでも日本を題材にした悲喜劇や、ピアノ・声楽などの小品曲が複数うみだされ、著名なオペラ作品が誕生する数世紀も前から、その音楽文化土壌は着々と形成されていました。

今夏の調査では、ローマ・ナポリ・フィレンツェなどイタリア各地の音楽院附属図書館や文書館を巡り、楽譜や各作品に関連する一次史料を網羅的に収集しました。とりわけ19世紀のイタリア楽壇に焦点を当て、同時代に生み出された日本表象西洋楽曲の特徴や、多数の作品が輩出されるに至った音楽基盤の形成過程を探りました。

同期間には資料アーカイブ共同研究会や楽曲分析セミナーにも参加し、現地の研究者や学生と親睦を深めたほか、現地での指導や学術交流に着想を得て、18世紀以前に発表された日本表象楽曲や、19-20世紀初頭の音楽関連図書・雑誌・新聞記事の調査を追加施行することもできました。今後は、日伊で開催される国際共同研究集会などにも参加予定であり、今回の調査をきっかけとして、さらなる研究深化に努めてまいりたいと強く思っています。



調査の様子



複写許可がおりず、手書きで写した楽譜



聖チェチーリア音楽院附属図書館（ローマ）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 National Institutes for the Humanities (NIHU)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構（人文機構）は、人間文化研究の各分野におけるわが国の中核的研究拠点、国際的研究拠点として、真に豊かな人間生活の実現に向け、学問的伝統の枠を超えて人間文化の研究を推進し、新たな価値の創造を目指します。本機構は、人間文化研究にかかわる6つの大学共同利用機関で構成されています。

人文機構本部には、総合人間文化研究推進センターと総合情報発信センターの2つのセンターがあります。

総合人間文化研究推進センター

人文機構を構成する6機関と国内外の研究機関や地域社会等との連携・協力を促進し、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、現代的諸課題の解明に資する組織的共同研究「基幹研究プロジェクト」を推進しています。

総合情報発信センター

人間文化にかかわる総合的学術研究資源をデジタル化することで、広く国内外の大学や研究者への活用を促進するとともに、社会との双方向的な連携を強化することで、研究成果の社会還元を推進しています。



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

本部 〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷町ビル2F
Tel. 03-6402-9200 (代表) <http://www.nihu.jp/>